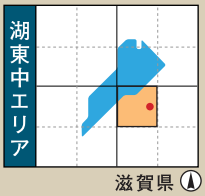
史跡
県指定

法堂寺廃寺跡

能登川町佐野　平成10年6月19日指定



湖東地方には、法堂寺廃寺を始め、たくさんの古代寺院の遺跡が残り、全国的に見ても特殊な地域となっています。発掘調査の結果により、法堂寺廃寺は、伽藍の配置や寺院の変遷がわかる遺跡として、重要な位置付けをされています。

当時のできごと	
672年	壬申の乱
797年	続日本紀なる
1189年	源頼朝　奥州侵略

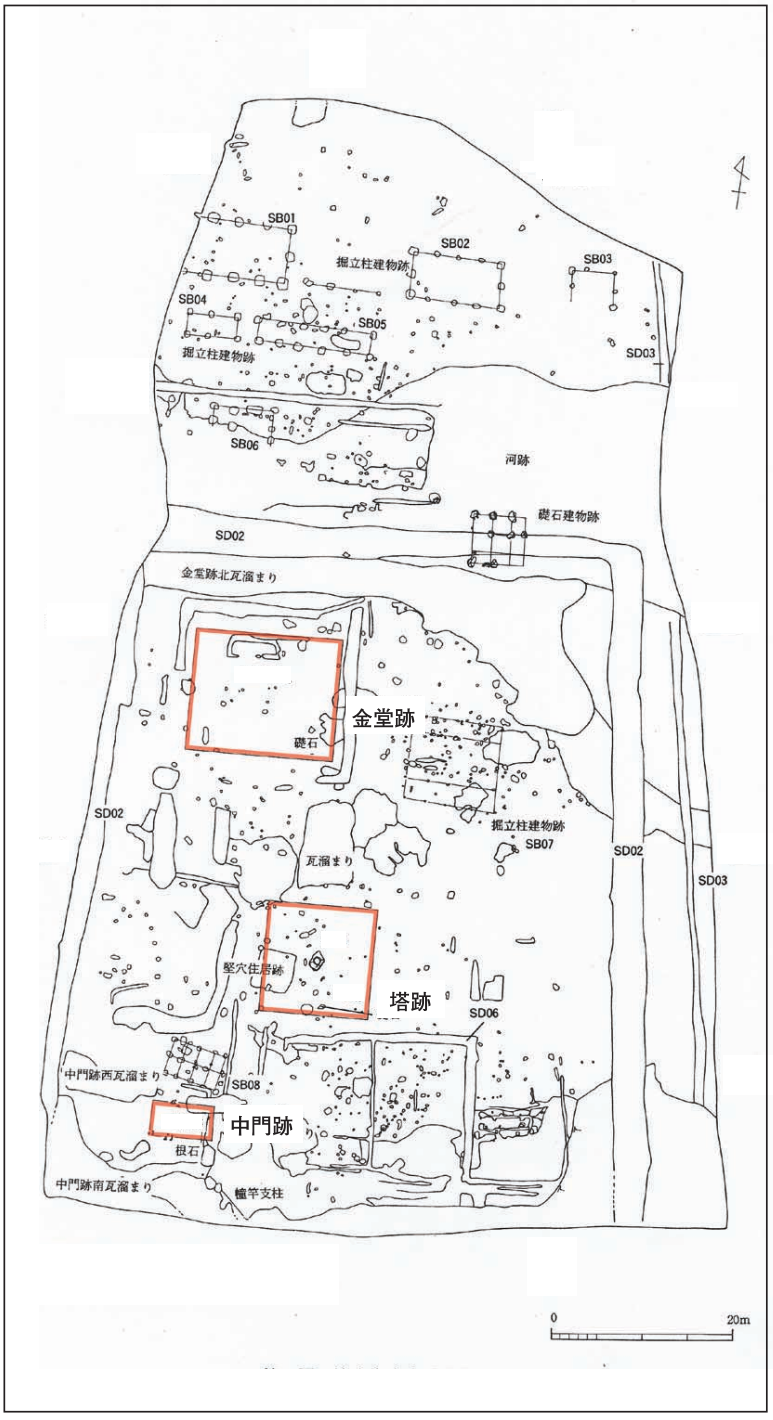
法堂寺廃寺の伽藍と変遷

誰が法堂寺廃寺を建立したのかについては、明らかなことはわかりませんが、出土した瓦の年代から、7世紀の後半には建立されていたと考えられます。伽藍の配置は、県下有数の規模の塔心礎（とうしんそ）を据えた五重塔と、金堂、中門を中心部に置き、その背後に僧坊と考えられる堀立柱建物を配します。その後、平安時代の初め頃に大洪水に遭い、旧伽藍を整地し、新たな建物を建てて再整備を行います。平安時代の終わり頃に伽藍の周囲に濠を巡らす工事を行い、内部に小規模な建物を造営しますが、その後まもなく廃絶してしまいました。

法堂寺廃寺の特徴

法堂寺廃寺跡は、周辺の神崎郡条里とは異なる正方位の地割の寺域を持っています。湖東地域にある多くの古代寺院のうち、伽藍の配置がわかっているのは、竜王町の雪野寺跡（学習シートNo.054）、蒲生町の宮井廃寺など少数しかない中にあって、伽藍の配置をほぼ推定できるこの遺跡は、古代寺院の構造を考える上で重要です。

大量の瓦類が出土していますが、古代の湖東地域で大きな勢力を持っていた、渡来人系の寺院に見られる瓦が出土しないことに加え、大和系の影響を受けた瓦もほとんど出土せず、代わって、他に類例の少ない独自文様の瓦が多いことから、この寺院は、この地域に勢力を持った、独自性の極めて強い氏族により建立されたものと考えられます。



法堂寺廃寺跡遺構図



発掘調査の状況



整備前の塔心礎



出土した瓦類



押出仏

古代寺院の系譜

古代の寺院の多くは、その地域の有力な氏族により、古墳の築造に代わり、その権威の象徴として、建立され始めたと考えられます。法堂寺廃寺の建立者の系譜は明確ではありませんが、周辺の遺跡からたどれば、弥生時代から古墳時代にかけての大集落である中沢・斗西遺跡や、最古級の前方後方墳である神郷亀塚古墳（学習シートNo.075）、後期古墳群の猪子山古墳群を当てはめることができるかもしれません。

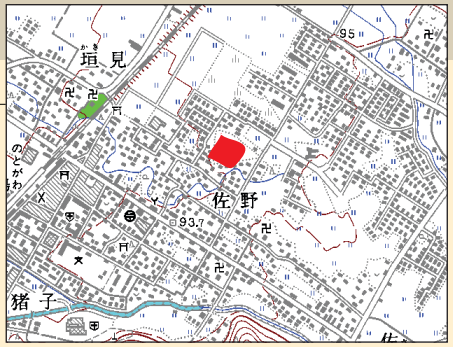
関連する文化財

斗西遺跡（能登川町）	弥生時代から古墳時代にかけての大集落。この集落の系譜上に法堂寺廃寺の建立者がいる可能性が高い
猪子山古墳群（能登川町）	法堂寺廃寺の南丘陵上にある後期古墳群。これも、法堂寺廃寺建立者の系譜を考える上で重要
法堂寺遺跡（能登川町）	法堂寺廃寺が建立する前に同じ場所で栄えた集落の遺跡

もっと深く知りたい

能登川町埋蔵文化財センター　☎0748-42-5011　神崎郡能登川町山路2225

法堂寺廃寺跡へのアクセス　JR琵琶湖線　能登川駅下車



【参考文献】〔法堂寺廃寺跡調査整備報告書〕能登川町教育委員会

滋賀県教育委員会事務局文化財保護課　平成16年3月